

16. 各領域の活動

<がん看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

看護相談事業の一環として、地域の看護師とがん看護学領域の学生とともに、がん患者と家族へのケアの質向上を目指して、継続的に「質の高いがん看護実践を検討する会」としてケア検討会を開催している。令和3年度は、COVID-19を考慮したうえで、地域の看護職者が安心して参加できるように完全オンラインで開催した。また、テーマは、中止となった令和2年度テーマを引継ぎ、「今後の治療や療養につなげる症状マネジメント」とした。

【第1回】

テーマ：がん患者の身体症状のマネジメントに困難を感じた事例

日時：2021年8月28日（土）13:00～15:00

場所：オンライン

参加者：18名（看護職者12名、大学院生3名、教員3名）

【第2回】

テーマ：がん患者の精神症状やスピリチュアルな苦痛症状のマネジメントに困難を感じた事例

日時：2022年2月11日（金）13:00～15:00

場所：オンライン

参加者：13名（看護職者8名、大学院生2名、教員3名）

2) リカレント教育

がん看護学領域では、①がん看護の質向上のための自己研鑽・情報交換、②修了生のネットワークづくりの充実を図ることを目的として、がん看護学領域修了生の会『アストラルの会』を発足し、活動している。今年度もCOVID-19を考慮して、オンラインで学習会を開催し、修了生の自己研鑽の場になるように取り組んだ。事例を通してがん看護専門看護師としての支援や組織のニーズに応じた活動の在り方を検討した。

【第1回】

テーマ：不均衡な状態が続く易怒性の高い下肢切断がん患者への関わり

事例提供者：帝京大学医学部附属病院 がん看護専門看護師 島田 いづみ 氏

日時：2021年7月18日（日）13:00～15:00

開催方法：オンライン

参加者：13名（修了生12名、教員1名）

【第2回】

テーマ：がん看護関連リソースナースとの連携

事例提供者：香川労災病院 がん看護専門看護師 石原 亜美 氏

日時：2022年2月23日（水）13:00～15:00

開催方法：オンライン

参加者：18名（修了生16名、教員2名）

3) がん看護学領域特別講義

がん看護学領域特別講義では、がん看護学領域の修了生が後輩である大学院生や修了生を対象に、修了後のがん看護専門看護師としての役割開発のプロセスや日頃の実践活動について語る機会を提供している。

テーマ：がん看護専門看護師の実践と役割開発

講師：佐賀大学医学部附属病院 がん看護専門看護師 田中 まゆこ 氏

日時：2021年9月21日（火）10:00～12:00

開催方法：オンライン

参加者：12名（大学院生11名、修了生1名）

内容：がん看護専門看護師認定後から現在に至るまでの活動として、役割獲得に向けた戦略や実践や院内のがん看護の質向上に向けた取り組みについて講義があり、組織の風土や特徴さらに社会状況の課題を踏まえた役割開発のプロセスを学ぶことができた。がんプロ学生は、活躍している先輩の看護実践を学ぶことで、将来がん高度実践看護を担う者として奮い立たされるとともに自身の課題にも向き合う機会になっていた。

4) がん教育外部講師派遣事業

がん対策推進基本計画に、がん教育・がんに関する知識の普及啓発が課題にあげられており、各都道府県でがん教育への取り組みが行われている。高知県では、がん教育の内容を充実させ、がんに関する正しい知識を理解し、がんを学ぶことを通して健康といのちの大切さに気づくことを目指し、外部講師派遣事業が行われている。今年度は、県内の高校から派遣依頼を受けて3名の教員が高校生および職員を対象にがん教育を実施した。

(1) 高知県立高知北高等学校

日時：2021年6月27日（日）

対象：通信制50名

講師：高知県立大学看護学部 田之頭 恵里

内容：がんの基礎知識、がんと生きる、がん検診の大切さに関する授業

(2) 高知県立山田特別支援学校高等部

日時：2021年9月21日（火）

講師：高知県立大学看護学部 有田 直子

内容：がんの基礎知識、がん検診の大切さ、たばこがんに関する授業

(3) 高知県立岡豊高校

日時：2021年10月19日（火）

対象：1年生

講師：高知県立大学看護学部 森本 悦子

内容：がんの基礎知識、がん検診の大切さ、たばこがんに関する授業

5) 中堅看護職員実務研修-がん中期研修-

中堅看護職員実務研修（がん中期研修）は、都道府県がん診療連携拠点病院である高知大学医学部附属病院が高知県からの委託を受けて隔年で行っている研修である。がん患者さんに対する看護ケアの充実のため、専門基礎知識・技術の修得とアセスメント能力の向上を通じて、臨床実践能力の高い看護職員の育成を図ることを目的とし、がん看護学領域の教員が研修プログラムの立案、講師紹介、講義等について高知大学医学部附属病院看護部と協働している。

研修期間：2021年9月4日（土）～11月13日（土）の13日間のプログラム

開催方法：対面とオンラインのハイブリット

参加者：10名

本学教員は、初日のオリエンテーションと「がん看護概論」「がん患者・家族にとってのQOL」の講義、最終日の研修のまとめ及び修了式を担当した。

2. 研究活動

がん看護学領域では、各教員が研究代表者（基盤研究B、基盤研究C）として、また共同研究者として（基盤研究C:7件）科学研究費助成金を受けて研究活動に取り組んでいる。各教員の取り組みについては、教員の活動、研究に関する報告を参照ください。修士論文・博士論文の2021年度の公表状況は、下記の通りである。

【修士論文】

- 1) 竹内奈々恵, 藤田佐和, 森本悦子: 中山間地域における終末期がん患者の在宅移行支援を行う看護師の困難と対処, 高知女子大学看護学会誌, 46(2), 49-60, 2021. 6
- 2) 上田三智代, 藤田佐和, 森本悦子: 終末期がん患者のアドバンスケアプランニングにおける一般病棟看護師の看護実践, 第36回日本がん看護学会学術集会, 横浜, 2022. 2
- 3) 溝渕美智子, 森本悦子, 藤田佐和: 人工肛門を造設した高齢がん患者と主介護者のセルフケア能力に対する臨床判断, 第36回日本がん看護学会学術集会, 横浜, 2022. 2

【博士論文】

- 1) 田代真理, 藤田佐和: がん患者のACPにおける看護支援の構成要素とその影響要因, 日本がん看護学会誌, 35 巻, 70-78, 2021
- 2) 高山良子, 藤田佐和: がんサバイバーと家族員のパートナーシップ—夫婦に焦点をあてて—, 日本がん看護学会誌, 35 巻, 342-352, 2021
- 3) Sanae Aoki, Sawa Fujita: Self Transcendence of Japanese Female Breast Cancer Patients with Hereditary Breast and Ovarian Cancer, Asia Pacific Journal of Oncology Nursing, Volume8, 670-678, 2021

3. 活動の評価

今年度は、COVID-19の影響のなかでも社会貢献活動が継続できるように、オンラインを活用した。ケア検討会では、オンライン開催に伴う個人情報保護の観点から、架空事例を作成して開催した。また、オンラインになったことで、参加者からは「遠方からでも参加が容易になった」という意見が聞かれた一方で、「オンラインでのディスカッションが難しかった」という意見も聞かれ、限られた時間でディスカッションが有意義になるような検討が必要であった。

リカレント教育では、学習会をオンラインで開催をしたことで県内外の修了生が参加することができ、先輩 CNS との活発な意見交換が行われて、研鑽の場になっていた。また、本学習会は、修了生やプレ CNS にとって、先輩 CNS の実践を学ぶ機会にもなっていると考える。

4. 次年度の課題

地域貢献活動については、COVID-19の感染状況に応じた開催方法を検討していく。ケア検討会では、地域の看護職者のニーズに合わせた内容を検討し、多くの方々に参加いただけるよう企画していく。リカレント教育については、次年度もオンラインを活用し、修了生同士のネットワークづくりも強化していく。

研究活動については、各教員が取り組んでいる研究を進め、結果を公表できるように取り組む。

<慢性期看護学領域>

1. 社会貢献活動について

- ・高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業の実施

高知県は、全国に比べて男性の壮年期死亡率が高く、糖尿病をはじめとする血管病対策が喫緊の課題となっている。このため、糖尿病に焦点をあて、糖尿病が重症化しやすいハイリスク者の減少及び、治療中断者の減少を目的に令和元年度より高知県より委託を受け、糖尿病保健指導連携体制構築事業を実施した。詳細の事業報告は、「健康長寿センターにおける活動」にて報告している。

1) 第3期モデル基幹病院の糖尿病療養支援体制の強化（6施設）

第3期モデル基幹病院の糖尿病療養支援体制の強化として、web会議システムを活用した血管病調整看護師の育成研修を6回実施した。また県と協力し地域連絡会を開催した。その中で地域や各施設の現状と課題を共有し、地域の保険者との連携窓口を共有するための支援を行った。

2) 第1-2期モデル基幹病院の活動支援（7施設）

第1-2期血管病調整看護師活動支援として、5月～7月に今年度の活動に向けてのフォローアップ訪問（対面、遠隔）を実施し、2月～3月に実践状況と活動に関するフォローアップ訪問（遠隔も含む）を実施し相談支援を行った。その中で次年度の各施設の取り組みを検討し、支援を実施した。

3) 公開講座の開催

本事業及び高知県の糖尿病重症化予防の取り組みを県内多職種や市民に周知する目的で、公開講座「糖尿病をもつ人々を支える切れ目のないケアを目指して～高知県糖尿病重症化予防プログラムにおける多職種の取り組み～」を遠隔開催した。

4) 事例検討会及び合同事例検討会の開催

第3期モデル基幹病院6施設に対し、web会議システムにて事例検討会を開催した。また、第1-3期モデル基幹病院13施設に対しweb会議システムにて合同事例検討会を開催し、血管病調整看護師の患者への理解を深めるために、事例を用いて施設間でグループワークを行った。それを踏まえて自施設のケア調整の課題を検討する場となった。

5) 事業報告会の開催

事業報告会は、新型コロナウイルスの感染リスク拡大の可能性を受け、参加者や地域の皆様への健康と安全を考慮し、オンデマンド開催とした。

2. 次年度の課題

新型コロナウイルス感染症の感染状況を確認しながら、可能な限り対面での訪問を実施し血管病調整看護師の活動継続を支援する。

モデル基幹病院における、血管病調整看護師の後進育成について検討する。

本事業の活動内容を広く周知するために、リカレントやケア検討会の活用を検討する。

<急性期看護学領域>

1. 社会貢献活動について

1) ケア検討会（看護相談室）

急性期看護学領域では、臨床現場で実践している看護師とともに、重症患者や家族へのケアの質を高めることを目的として、「クリティカルケア看護学ケア検討会」と称して事例検討会を開催している。昨年度から引き続き、今年度のテーマを「鎮める力」とした。2021年6月5日にオンラインで開催し、7名の参加があった。提示事例である難治性不整脈の患者へのかかわりを通して、患者の意思や家族の意向、医学的適応などから多面的に情報を整理し、現象の本質を見極める重要性や、患者と家族のためにできるケアやケアのタイミングについてディスカッションした。その後、教員によるミニレクチャー「エビデンスに基づく実践」を行った。

2) リカレント教育

(1) クリティカルケア看護学領域リカレント教育

リカレント教育では、在學生や修了生を対象に、現在活躍している専門看護師を迎え、学習の機会を提供している。今年度は2021年7月22日に、千葉県救急医療センター急性・重症患者看護専門看護師の比田井理恵先生を講師に迎え、「専門看護師としての臨床的思考過程」をテーマに特別講義を開催した。オンラインでの開催とし、14名の参加があった。高度実践看護のコンピテンシー、専門看護師の役割などの基本的知識に加え、臨床看護場面における現象の捉え方や専門看護師としての思考過程、エビデンスに基づいた看護実践について、講義と事例検討をおこなった。

(2) CCNS 申請への支援

今年度はオンラインにて事例検討会を5回開催し、のべ23名の参加者があった。開催内容は以下の通りである。

- 第1回：2021年5月16日「実践」
- 第2回：2021年6月19日「倫理調整」
- 第3回：2021年7月10日「コンサルテーション」
- 第4回：2021年8月1日「コーディネーション」
- 第5回：2021年9月18日「実践」

3) 高知医療センターとの包括的連携事業

(1) 部署内の既卒新人および部署間異動者に対する実践における教育的なかかわり方に関する研修

昨年度から要望があり、3Aフロアへの異動者及び配属された既卒新人看護師に対して、実地指導者が教育的に支援することができるよう、研修を行った。2021年5月31日に研修会を開催し、7名の参加者があった。理論を用いながら実践レベルで考えられるように講義を行うことで、参加者からの質疑も活発にあり、実践ですぐに活かせる研修となった。次年度も継続して教育担当者を支援していく。

2. 研究活動について

急性期看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費等の助成を受け研究活動に取り組んでいる。

2021年度から「クリティカルケア看護師の緩和ケアコンピテンシー育成プログラムの開発」（研究代表者：大川宣容）、2020年度から「ICUにおける人工呼吸器装着患者の集中治療後症候群予防のケアガイドライン開発」（研究代表者：神家ひとみ）、2018年度から「消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシー支援プログラムの開発」（研究代表者：森本紗磨美）、2017年度から「トランジションを基盤としたICU新人看護師の看護実践能力向上支援プログラムの開発」（研究代表者：田中雅美）の研究に取り組んでいる。

修了生の研究活動支援により、1名が第17回日本クリティカルケア看護学会にて発表、1名が高知女子大学看護学会誌47巻1号に原著論文を投稿し、掲載された。修士論文として「治療が奏功しない重症患者に対するICU看護師のcomfortケア」、「活動拡大に向かう急性心不全患者へのセルフモニタリング支援」のテーマで研究に取り組んだ。

3. 大学院関連

大学院特別講義として、2つのテーマで企画した。①三宅陽一郎先生（医療法人臼井会田野病院循環器内科部長・心臓血管外科部長）を講師に迎え、「心臓弁膜症術後において大切なこと」をテーマに、12月15日に開催した。②齋坂美賀子先生（社会医療法人近森会近森病院急性・重症患者看護専門看護師）を講師に迎え、「専門看護師による事例検討：多発外傷」をテーマに2月22日に開催した。

また、クリティカルケア看護学領域CNSコース2名の大学院修了生を輩出し、4名の急性・重症患者看護専門看護師が誕生した。

4. 評価および次年度の課題

昨年度に引き続き、リカレント教育やケア検討会はオンラインでの開催となったが、十分に事業への参画や学習会の開催を企画・運営することができた。今後の運営方法については、オンライン開催だけでなく、状況に応じてハイブリッド型の運営も検討していく。また、研究成果を公表することが十分にできていないことが領域としての課題であり、工夫をして研究に取り組む時間の確保をしていく。

<小児看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) 赤ちゃん同窓会

今年度は、Covid-19 拡大により開催中止となった。参加者は易感染性のある子どもであり、今後、オンラインシステムの活用についても高知医療センターと協議していく予定である。

2) 高知医療センター・高知県立大学包括連携事業

(1) 継続教育支援

毎年、高知医療センターすこやかAフロアと連携し、実施計画を継続して立案して教育支援を行っている。教育支援では、新人看護師を対象とした「けいれんの子どもへの対応」をテーマに、シミュレーション勉強会を行った。本年度は、Covid-19の影響が懸念されたため、実施日時を柔軟に調整し、年間4回開催を目指した。昨年度はCovid-19拡大に伴い中止となったが、今年度は、感染拡大が落ち着いた11月に第1回シミュレーション勉強会を行い、科長、副科長、そして新人看護師を含めた4名の参加を得ることができた。勉強会は、けいれんに関する知識やケアの実際を話し合う機会にもつながった。その後、第2回目の勉強会として病室でのシミュレーションの実施に向けて日程調整を試みたが、再度、感染拡大等がみられたため、開催中止となった。

次年度、病棟管理者とも今後の継続教育支援について前期・後期に2回ずつの実施ができるような工夫を検討し、かつ、オンラインシステムを活用した継続教育支援の実現に向けて、検討する予定である。

本年度は、第3回日本看護シミュレーション学会学術集会で、これまでの病棟と小児看護学領域のシミュレーション教育について実践報告を行った。

- ・佐東美緒、高谷恭子、有田直子、田之頭恵里、橋本住香、松岡義典、猪野智早：新人看護師を対象に病院－大学が連携して行うシミュレーション教育についての実践報告,日本看護シミュレーションラーニング学会第3回学術集会,高知,令和4年2月

(2) 小児看護の魅力語る会

Covid-19 拡大により中止となった。来年度に向け、オンラインシステムを活用した開催などを検討していく。

(3) 修了生の会

例年、日本小児看護学会学術集会1日目に開催していたがCovid-19拡大により中止となった。修了生のニーズを把握しながら、次年度開催を検討していく。

(4) 大学院事例検討会

① 小児看護学領域事例検討会

修了生や在校生を対象として、例年、年3回程度開催していたが、Covid-19の感染予防および拡大防止対策として、学外者が参加しての対面での会合等は原則開催しないという全学的な方針に従い、開催を中止した。Zoomでは、個人情報漏洩の危険があるため、今後の開催方法について検討していく予定である。

2. 研究活動

1) 高知医療センター・高知県立大学包括連携事業

(1) 臨床実践能力及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究

開催日時：Zoomによるオンラインにて開催

(4/24・5/29・7/22・8/28・9/23・12/19・2/20・2/23・3/27)

開催場所：高知県立大学看護学部または研究メンバー職場・自宅、高知医療センター

参加人数：17名（医療センター2名、県大12名）

内 容：「命に向き合う子どもと親のエンド オブ ライフへの看護支援モデルの構築と活動」
(研究代表者：高知県立大学看護学部教授 中野綾美)における、家族を対象とした研究を NICU・GCU、小児病棟の看護師とともに共同研究している。本年度はインタビューを実施することができ、現在、分析中である。また、看護師を対象としたアンケート調査では、小児専門病院のみならず、総合病院の小児病棟や小児科外来、周産母子センターなどに勤務する看護師や小児の訪問看護に携わっている看護師にも研究協力を依頼した。その結果、新たに 12 施設から 183 通の回答をいただいた。今後は、小児専門病院と総合病院等との比較も行いながら、得られたインタビューデータとともにアンケート調査結果に基づく、「命に向き合う子どもと親のエンド オブ ライフへの看護支援モデルの構築と活用」のためのガイドラインや指針の作成を遂行していく。

研究成果として、看護師を対象としたインタビュー調査の分析結果を日本家族看護学会第 28 回学術集会にて示説発表 (3 本) した。また、小児専門病院の看護師を対象としたアンケート調査結果を、第 41 回日本看護科学学会学術集会にて口演発表 (3 本) した。

3. 活動の評価

Covid-19 拡大に伴い、NICU 退院後の子どもや家族への支援として高知医療センターと共催で開催している赤ちゃん同窓会や、専門職者、修了生を対象とした事例検討会を開催することができなかった。感染拡大が落ち着いた 11 月にシミュレーション勉強会を開催したが、その後は再度、感染拡大がみられたため研修を開催することができなかった。今後、社会貢献活動の運営方法については、オンラインシステムの活用ならびに、状況に応じてハイブリッド型の運営も検討していく。

4. 次年度の課題

地域貢献活動については、Covid-19 拡大状況に合わせて、参加者の安全に考慮し、継続可能な方法を検討していく。Covid-19 拡大状況にもよるが、Web ミーティングツールの活用により遠方の修了生や専門職者が参加しやすくなるという利点があるため、活用を検討していく。

研究活動に関しては、修了生の論文投稿の支援および教員の論文投稿、ガイドラインの作成などに取り組んでいく。

<母性・助産看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

話題提供者より「ペリネイタルロスを経験した対象へのグリーフケア」について事例を提供いただき、高知県下の周産期施設で従事している助産師および臨床心理士を含む7名で検討した。ペリネイタルロスを経験した対象との短期間の関わりの中で関係性を構築していくことや、短期間でチームとしてケアの方向性を共有してケアを実践することの難しさ、対象の心情に触れることに対する医療者としての心情を共有し、各参加者の経験や所属する施設でのケアや取り組みについて意見交換を行った。

コロナ感染症対策として Web 会議システムを用いて行った。接続の問題が若干あったものの概ね問題なく進行できた。

2) 令和3年度母性・助産看護学領域交流会

Web 会議システムを使用して交流会を行った。新卒2名を含む6名が参加し、臨床での状況について情報交換を行った。また、勤務で参加できなかった5名からはメッセージが届き、それぞれの場所で活躍している様子が伺えた。

2. 学習会

母性・助産看護学に関する学習会を、Web 会議システムにて、本年度5回開催した。県内外の助産師、母性・助産領域教員（他大学含む）の参加があった（各回4～5名の参加）。先行研究や実践での看護活動を通して、下記をテーマに意見交換を行った。

[第1回] 令和3年11月10日：高齢初産婦へのケア

[第2回] 令和3年12月1日：母子のための地域包括ケアシステム

[第3回] 令和4年1月12日：産後うつへのモニタリング

[第4回] 令和4年2月2日：在留外国人女性とその家族への妊娠・出産・育児への看護支援

[第5回] 令和4年3月2日：女性の意思決定を支える看護

3. 研究活動

母性・助産看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。2018年度から「ICTを用いた妊婦の災害への備えを促進するための介入の効果検証」（研究代表者：渡邊聡子）、2021年度から「周産期医療施設における両親を対象とした妊産婦健診ケアモデルの開発と検証」（研究代表者：嶋岡暢希）、「Family Confidence を高める乳児家族ハイブリット型看護介入モデル開発」（研究代表者：岩崎順子）、2017年度から「妊娠期ケアにおける臨床判断に関する現任教育プログラムの開発」（研究代表者：西内舞里）の研究に取り組んでいる。

領域に関連する研究成果として、高知女子大学看護学会誌に2本投稿した。第3回日本看護シミュレーションラーニング学会学術集会に1本、第62回日本母性衛生学会学術集会に1本、第36回日本助産学会学術集会に1本発表した。

<老人看護学領域>

1. 社会貢献活動

Covid-19 感染拡大の影響により、ケア検討会は実施することができなかった。来年度は、WEB 会議システムを活用したケア検討会を実施していきたいと考えているが、個人情報確保できる開催方法にしていきたい。

高知医療センターとの包括連携に関しては、今年も高齢者ケア①「急性期病院における高齢者ケア（高齢者の包括的評価）」、②「急性期病院における高齢者ケア（認知症の理解）」研修を担当したほか、令和3年6月から、毎月第4火曜に開催されている認知症ケアリンクナース会にオブザーバー参加を行っている。令和3年度は主に、会の趣旨を理解するためのオブザーバー参加であったが、2回ほど行われた事例検討では、グループに入って意見交換に参加した。

2. 研究活動

「急性期病院に入院中の認知症高齢者に対する効果的ケア・パッケージの開発」（2019～2022年、基盤研究C、研究代表者、竹崎久美子）に取り組んだ。本年度は、ケア・パッケージ（案）を作成した。その作成したケア・パッケージ（案）について、看護師を対象に病棟での実施が可能か否かの意見をいただくインタビューを行うと共に、実践できるように加筆修正を行う予定である。来年度は、CNSやCNを対象にインタビューを実施したいと考えている。研究成果として「日本における急性期病院の看護師への認知症に関する現任教育の文献検討」「術直後の床上安静期における認知症高齢者のケアに対する看護師の困難感」を高知女子大学看護学会誌47（1）に発表した。

3. 教育活動

今年度は、Covid-19 感染拡大の影響により、講義科目において、前期はオンデマンド型の遠隔授業、後期は遠隔授業と対面授業のハイブリッド型授業にて展開した。従来対面で実施していた高齢者疑似体験演習（2回生前期科目「老人の健康と看護」）は全て遠隔、ゲストスピーカーによる「認知症と共に生きる人を取り囲む現状」の講義および様々な疾患状態に対する高齢者ケアの特徴のグループワーク（2回生後期科目「老人看護援助論」）は、遠隔と対面とのハイフレックス型で行った。

6月の総合看護実習は、前半3日を終えたところで急遽病院実習が行えなくなったため、学内で3日間担当させていただいた事例の看護計画を完成させた他、実習目的の学習課題に沿った映像事例などを通して、在宅療養における倫理的ジレンマや、老人看護の視点で大切にしたい入院中の日常生活援助などについて、グループでの共有と個別指導を行い、実習目的を達成することができた。

<精神看護学領域>

1. 活動

1) 社会貢献活動

(1) 看護相談室（ケア検討会）

本年度も、高知県在職の精神看護専門看護師有志の会である「高知精神看護専門看護師の会」と協働し、専門看護師の実践能力の質の向上を目的としたケア検討会を3回実施した。

① 第1回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

- ・ 日 時：令和3年6月20日(日) 10:00-12:00
- ・ 場 所：高知県立大学看護学部棟 C313、Web 開催
- ・ 参加者：17名〈本学大学院生5名、本学大学院修了生5名、他大学大学院修了生2名、前教員1名、教員4名〉
- ・ 内 容：精神状態の査定を導入するプロセスと成果について報告していただき、組織に浸透させるための今後の方向性と、成果の示し方についてディスカッションを行った。ディスカッションを通して、精神症状をアセスメントする目的を改めて捉えなおすとともに、セルフケアのアセスメント導入へ発展させることについて考えることができた。

② 第2回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

- ・ 日 時：令和3年9月16日(木) 19:00-21:00
- ・ 場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催
- ・ 参加者：14名〈本学大学院生4名、本学大学院修了生5名、他大学大学院修了生2名、教員3名〉
- ・ 内 容：小児看護専門看護師より、人との関わりや治療への拒否が強いケースについて報告していただき、精神看護の視点を含めたケースの捉え方や、関わりに困難を感じている看護師へのメンタルケアについて意見交換を行った。話題提供者からは、「領域を超えてたくさんご意見やアドバイスをいただき専門性の前に、共通することや基盤となるところは同じところもあり、その上で、疾患や治療などの専門性を持ち合わせていくことで、さらに看護を深めていくことができると感じました。」との感想が聞かれた。

③ 第3回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

- ・ 日 時：令和4年3月17日(木) 19:00-21:00
- ・ 場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催
- ・ 参加者：16名〈本学大学院生4名、本学大学院修了生6名、他大学大学院修了生2名、教員4名〉
- ・ 内 容：役割開発をテーマとして、CNSの活動の実際と今後の課題について報告していただき、変革者として新しい役割を獲得する際の交渉方法について意見交換を行った。参加者から、求められる役割が多い中で力を入れるべき課題に焦点化することや、管理者との交渉方法、経営者やスタッフとの対話を重ねて課題を把握することなどの意見が出された。

(2) 精神看護領域に携わる卒業生・修了生の交流会

日本精神保健看護学会学術集会の開催に合わせて交流会を実施してきたが、令和3年度はCOVID-19の感染予防のため中止した。来年度は、COVID-19の感染予防策をとりながら、卒業生・修了生との交流を深める機会を設けたいと考えている。

(3) リカレント教育

① 高知県西部地区研修会（本学健康長寿センター・日本精神科看護協会高知県支部との共催事業）

- ・ 日 時：令和3年9月25日(土) 13:30～16:00
- ・ 参加者：一般参加者42名（看護師・准看護師39名、その他3名）、日精看役員5名、本学教員3名、大学院生2名
- ・ 場 所：医療法人一条会 渡川病院、高知県立大学看護福祉棟 F206
- ・ 内 容：この事業は、高知県西部地区の精神科医療従事者への教育機会の提供を目的として毎年実施している。今年度は、「依存症の理解とコロナ禍における支援」をテーマとして Web で開催した。研修前半は、依存症の理解、災害と依存症の関連について、教員と大学院生で講義を行った。研修後半は、コロナ禍において失業し、断酒会への参加が困難となっているアルコール依存症の事例を用い、①事例のケース像、②退院に向けてもしくは退院後に、どのような支援が必要になるか、についてグループワークを行った。グループごとに話し合った結果を発表し、参加者全員で共有を行った。

(4) 精神科病院におけるボランティア活動

精神科病院の催し物に、学生がボランティアとして参加していたが、COVID-19の影響でボランティア募集がなかったことから、活動は実施していない。

2) 研究

(1) 教員の研究活動

精神看護学領域では、それぞれの教員が研究助成を受け、研究に取り組んでいる。「認知症の人と家族の伴走を支援する家族看護援助モデルの開発」（科学研究費助成金 研究代表者：田井雅子 2021～2024年度）、「統合失調症患者の在宅生活を支援する看護師の交渉コンピテンシー育成プログラムの開発」（科学研究費助成金 研究代表者：藤代知美 2018～2021年度）、「高幡保健医療圏における精神障害に対応した包括的支援マネジメントモデルの開発」（高知県立大学戦略的研究推進プロジェクト 研究代表者：瀧めぐみ 2019～2021年度）、「メンタルヘルスの課題を抱える人と支援者のつながりの構築」（高知県立大学戦略的研究推進プロジェクト 研究代表者：藤代知美 2021～2022年度）に取り組んでいる

研究成果として、高知女子大学看護学会誌に原著論文1編の論文投稿を行った。学会発表では、第41回日本看護科学学会学術集会にて2編の発表、第31回日本精神保健看護学会ワークショップにて2編の研究報告を行った。

(2) 大学院生の学会発表支援

第31回日本精神保健看護学会にて、博士前期課程修了生の発表支援を行った。

2. 評価

今年度は、Webを活用することで、看護相談室を3回開催することができた。Web開催により、遠方の修了生も参加が可能となり、他領域のCNSや他大学院修了生も加わって、毎回例年より多くの参加があった。また、昨年度に比べ、個人情報保護した情報の共有方法を事前に検討できたことで、CNSの活動にとどまらず事例について検討することができた。

3. 次年度の課題

引き続きWeb会議システムなどを活用し、修了生の交流を促進していくとともに、メンタルヘルスに関わる他領域のCNSと合同の実践事例検討会を実施できるよう取り組む。また、修了生の学会発表や論文投稿の支援を行うことが課題である。

<家族看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

今年度も COVID-19 の感染予防および拡大防止対策として、不特定多数の学外者が参加する会合等は原則開催しないという全学的な方針に従い、開催を中止した。

2) リカレント教育

大学院修了生への継続的なサポートの一環として、リカレント教育を行っている。今年度は、昨年度の修了生対象のアンケート調査の結果に基づき、年度当初に年間の活動計画を提示した。修了生から提供された事例についての事例検討と、教員によるテーマに関するミニ講義とディスカッションを交互に企画、毎月第3金曜日に Web ミーティングツールを活用し7回開催した。

修了生からは3事例が提示され、家族アセスメント、家族への看護支援の方略、家族との援助関係の形成、多職種との協働における看護者の役割など、様々な視点からディスカッションを行った。参加者にとって、自身の実践を振り返ったり、課題に気づき解決に向けた取り組みのヒントを得たりする機会となった。テーマ別のディスカッションでは、教員からのミニ講義、情報提供をふまえて意見交換を行い、知識の広がりにつながっていた。Web ミーティングツールを用いた開催は、遠方の修了生も負担なく参加でき有効であった。

【第1回】

日 時：令和3年5月21日（金）18：30～20：30

参加者：修了生9名、大学院在学生2名、教員3名

テーマ：コンサルテーションの技

講 師：坂元綾、中井美喜子

【第2回】

日 時：令和3年6月18日（金）18：30～21：20

参加者：修了生7名、大学院在学生1名、教員4名

事例検討：コロナ禍で面会制限となった患者・家族の意思決定における課題と支援

事例提供者：修了生

【第3回】

日 時：令和3年7月16日（金）18：30～21：15

参加者：修了生6名、大学院在学生2名、教員4名

テーマ：スタッフの機能を活かす関わり

講 師：中井美喜子

【第4回】

日 時：令和3年10月15日（金）18：30～20：30

参加者：修了生4名、大学院在学生1名、教員4名

事例検討：意思疎通が困難な終末期患者の治療について家族間で意見が異なる家族の意思決定支援

事例提供者：修了生

【第5回】

日 時：令和3年11月19日（金）18:30～20:40

参加者：修了生4名、大学院在学生1名、教員5名

テーマ：看護研究活動への支援

講 師：瓜生浩子、坂元綾

【第6回】

日 時：令和3年12月17日（金）18:30～20:40

参加者：修了生3名、大学院在学生2名、教員4名

事例検討：入院中の子どもに対する付き添いの母親による虐待が疑われた家族への支援
事例提供者：修了生

【第7回】

日時：令和4年1月21日（金）18:30～20:40
参加者：修了生3名、大学院在学生1名、教員6名
テーマ：家族看護を取り巻く社会の動向
講師：長戸和子、瓜生浩子、中井美喜子

2. 研究活動

1) 教員の研究活動

家族看護学領域では、それぞれの教員が研究代表者として、また、相互に共同研究者として科学研究費助成金を受けて研究活動に取り組んでいる。「慢性心不全患者・家族のアドバンス・ケア・プランニング支援ガイドラインの開発」（研究代表者：長戸和子、2020～2022年度）、「患者・家族と看護者間のコンフリクトの発生・悪化を予防する教育プログラムの開発」（研究代表者：瓜生浩子、2020～2022年度）、「術前の心理的準備性向上による術後認知機能障害を防ぐケアモデルの開発」（研究代表者：井上正隆、2020～2023年度）、「2型糖尿病患者の足病変予防のセルフモニタリング促進看護支援ガイドラインの開発」（研究代表者：坂元綾、2021～2025年度）、「人工呼吸器を装着した児と家族のヘルスケア機能を増進するためのケアガイドライン開発」（研究代表者：中井美喜子、2019～2021年度）に取り組んでいる。

研究成果として、高知女子大学看護学会誌に原著論文2編、高知県立大学紀要に2編の論文投稿を行った。学会発表は、第41回日本看護科学学会学術集会1題、日本災害看護学会第23回年次大会2題、第22回日本医療情報学会看護学術大会1題、第80回日本公衆衛生学会総会1題、第3回日本看護シミュレーションラーニング学会学術集会1題の発表を行った。

2) 修了生を対象としたアンケート調査の実施

今後の家族看護学領域の活動の活性化に役立てることを目的として、修了生全員を対象にWebによるアンケート調査を実施し、6名からの回答を得た。調査内容は、現在の所属部署、職位、役割、家族看護に関して実践していること（実践、教育、研究など）、課題や困っていること、今後高めていきたい能力や学びたいこと、そのために大学からどのようなサポートがあればよいか、リカレント教育で学びたいことなどである。

修了生は、所属部署の困難事例へのダイレクトケアの実践、コンサルテーション、研修に留まらず、院内でのチーム活動、訪問診療の立ち上げや、院外にも活動範囲を広げ研修会の講師を務めるなど、様々な活動場所で家族看護実践に取り組んでいた。

アンケート結果では、課題や困っていることとして、多忙な中で様々な活動に思うように取り組めないことが挙げられていた。今後高めていきたい能力や学びたいこととして、社会の変遷のなかでの家族の捉え方や支援などがどのように変わってきているのか、あらためて家族とは何かなどを考えるとともに、CNSとしての役割開発や合意形成へ向けた支援能力などを高める必要性が挙げられていた。大学に求めるサポートやリカレント教育で学びたいこととして、事例検討の継続、最新の家族看護の動向、研究活動などであった。具体的に取り上げてほしいテーマとしては、コロナ禍で面会制限がある中での家族支援やACPと家族看護、CNS資格取得後の活動展開、ヤングケアラーなどがあがっていた。

3. 活動の評価

今年度も昨年に引き続き、COVID-19の影響により地域の専門職者を対象とした事例検討会を開催することはできなかったが、修了生対象のリカレント教育を定期的で開催した。昨年度に実施したアンケート結果に基づき内容と日程を事前に提示することで、自己のニーズに添った回に参加することができたのではないかと考える。また、家族支援専門看護師の資格を有している修了生の参加もあり、相互研鑽や情報交換の機会としても位置づけることができたと考えられる。また、在学生に

としては、修了生の家族看護実践の実際やその中での課題を知り、ロール・モデルを知る機会となった。

研究活動に関しては、毎週月曜日に研究ミーティングの開催を予定としていたが、時間が持てず今年度はそれぞれで目標を立て計画的に取り組むことはできたが、成果の公表については十分とは言えない。

4. 次年度の課題

リカレント教育は次年度も継続する。COVID-19の感染拡大状況にもよるが、Webミーティングツールの活用により遠方の修了生が参加しやすくなるので、引き続き活用しながら実施することを考えている。また、次年度も修了生対象のアンケート調査の結果に基づき、各回のテーマと内容を決めて年間の活動計画を年度当初に提示し、より多くの修了生が参加できるようにする。

研究活動に関しては、修了生の論文投稿の支援および教員の論文投稿の促進、教員の研究への修了生の参画などに取り組んでいく。

<在宅看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) 修了生 Web 交流会

リカレント教育の一環として Web 開催した。県内外の病院、地域、訪問看護ステーション、教育など様々な場で活躍されている修了生間で交流を深めた。

日時:令和3年9月24日(金) 18:30~20:30

参加者:在宅看護学領域修了生7名 博士前期課程学生1名 教員4名 計12名

交流会では、修了生のそれぞれの近況、医療器具の規格変更に伴う病院・地域・在宅の状況、医療などの社会資源が少ない地域への退院支援など、現在抱えている疑問や課題について解決に向けた話し合いを行った。また、新型コロナウイルス感染症の影響で、病院への立ち入り制限に伴う退院前カンファレンス等が開催されず療養者の状況把握困難など、これまでのような退院支援の取り組みが十分行えない中で、現状に見合う在宅移行についても検討し、それぞれの立場で得た情報の発信や、Webの活用など新たな情報共有の方法を模索するなど対策を検討した。

2) ケア検討会

看護学部看護相談室事業として、在宅看護学領域ケア検討会を年2回企画した。第1回は、前年度より訪問看護師等からニーズのあった、COVID-19の影響で病院の面会制限の継続に伴い、自宅で過ごすことを希望されるターミナル期にある療養者とその家族のケアの事例を取り上げた。第2回は、COVID-19が県内特別警戒となり、訪問看護ステーションの業務が多忙な状況がありケア検討会の開催を見合わせた。以下、第1回ケア検討会について報告する。

日時:令和3年11月18日(木) 18:30~20:30

参加者:病院看護師11名(うち専門・認定看護師2名)、訪問看護師11名、教員4名、計26名

予後予測が難しいとされる慢性心不全をとりあげ、エンドオブライフ期にある療養者とその家族のケアについて、治療抵抗期にある慢性心不全の病態と予後予測について参加者の方々の病院や在宅で実際に行っている治療やケアを紹介し合った。また、診療ガイドライン、病みの軌跡の理論等も合わせて意見交換し、療養者や家族のニーズに対応するケアのポイントを出し合い、慢性心不全の特徴や、エンドオブライフ期を考慮したケアの視点を整理した。さらに、症状悪化に伴う対応策について病院でできる対応策、在宅でできる対応策を共有して、在宅と病院が1つのチームとして治療やケアを共有して提供する仕組みの活用についても検討した。

3) 健康長寿センター事業の展開

以下の健康長寿センター事業に領域教員が中心となって事業展開を行なった。なお、詳細の事業報告は、第1部「10.健康長寿センターにおける看護学部の活動」にて報告している。

(1) 地域医療介護総合確保基金事業

- ①入退院支援体制推進事業
- ②高知県介護職員喀痰吸引等研修
- ③中山間地域等訪問看護師育成講座

(2) 地域連携事業

- ①土佐市連携事業：地域ケア会議推進プロジェクト、
- ②地域ケア会議コンサルテーション事業

4) 中央西福祉保健所管内地域包括ケアシステム構築への支援

中央西福祉保健所管内地域包括ケアシステム構築に向け、公立病院連絡会、中央西在宅医療連携委員会等にアドバイザー等として参画し、支援を行なった。

2. 研究活動

1) 研究発表

第 41 回日本家族看護学会学術集会で 2 件、第 41 回日本看護科学学会で 3 件、第 23 回日本災害看護学会 1 件、第 3 回日本看護シミュレーションラーニング学会 1 件、第 52 回日本看護学会学術集会 1 件の発表をした。

2) 活動中の研究

科学研究費助成事業（以下、科研）では、研究代表者として 6 件、学内の戦略的研究推進プロジェクトとして 1 件の研究を行っている。

(1) 科研

課題名	期間	代表者
慢性心不全高齢者の再入院を予防するシームレスケアを創る退院支援ガイドラインの開発	2018.4.1-2022.3.31	森下安子
慢性疾患患者を支える外来看護師のアセスメント能力を育成する教育プログラムの開発	2019.8.30-2022.3.31	竹中英利子
組織学習を支える訪問看護管理者のコンサルテーション力を高める教育支援モデル構築	2020.4.1-2023.3.31	森下幸子
学童期にある発達障害児の家族の家族ストレスを促進するケアプログラムの開発	2020.4.1-2024.3.31	源田美香
慢性腎臓病患者のサインマネジメントを支援する外来看護師教育プログラムの開発	2021.4.1-2024.3.31	竹中英利子

(2) 戦略的研究プロジェクト

課題名	期間	代表者
高齢者の在宅看取りを促進する地域文化の創生を目指す教育プログラムの開発	2020.4.1-2022.3.31	川上理子

また、地域看護学領域、家族看護学領域、看護管理学領域、小児看護学領域、災害看護学領域の科研の研究分担者として 7 件に参画している。

3. 評価

社会貢献活動では、前年度に修了生や、地域の看護師から集約した要望をもとに、修了生間の近況報告、在宅ケアのトピックスを共有する修了生 Web 交流会と、コロナ禍でターミナルケアを必要とする療養者が増えている現状を踏まえたケア検討会を企画した。それにより、修了生 Web 交流会では、全国で活躍する修了生の参加を得て、活発な相互交流の機会をもつことができた。ケア検討会では、県内の病院看護師、訪問看護師から広く参加を得て、療養者のニーズに対応するためのケアについて検討した。今後も、臨床の専門職からのニーズを見極めつつ、在宅看護について検討する企画を行う。

健康長寿センターの事業展開では、コロナ禍においても、感染対策を徹底し、予定どおり実施することができた。

研究活動では、コロナ禍において昨年に引き続き進捗が遅れる傾向にあり、感染が収まっている時期にデータ収集等、速やかに動けるようさらに領域で協力して進めていく。

4. 次年度の課題

- ・在宅ケアを担う専門職のニーズに応じた情報交換やケア検討会の企画を継続してネットワークを強化する。
- ・科研等、研究活動を計画的に進める。

<地域看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) 高知県保健師人材育成

高知県保健師人材育成プログラムは、高知県健康長寿政策課と協働で取り組んでいる。詳細は、5)高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動参照。

(1) 新任期保健師育成に係わる OJT 担当者会

プリセプターや管理者を対象にした研修では、プリセプター能力育成研修として、年に2回の実施予定だったが、COVID-19感染拡大の影響で1回のみの実施となった。研修では、高知県新任期保健師支援プログラム Ver.3 の説明と共に、目標管理、組織管理や人材育成を効果的に実施するための講義と、「管理者・プリセプターの役割」に関する講義を行った。

令和3年4月27日(火) 13:30~15:30 参加者:58名

講義 『新任期保健師支援プログラム』行動目標とは何か 小澤若菜

「管理者・プリセプターの役割」 時長美希

(2) 中堅期保健師育成支援

講師は県立大学時長教授、高知大学医学部齋藤講師が担当し実施。ファシリテーターは県の保健師が担当。新型コロナウイルス感染症の状況を考慮し、Web会議形式での開催を基本とし、感染状況が落ち着いている時は一部集合研修とした。(受講生 県2名、市町村2名)

(3) 福祉保健所管内新任期保健師研修

福祉保健所が開催する管内新任期保健師・中堅期保健師の人材育成に関する研修では、集合研修の課題提出に向けたフォローアップとして個別課題の取り組み状況について確認を行った。また、プリセプターや管理者が支援する能力を高める講義やグループ討議での助言を行った。

中央東福祉保健所	9月13日(月) 13:30~16:30 参加者:6名 3・4年目保健師 内容:課題に関するグループワーク・意見交換:川本美香
須崎福祉保健所	新任期保健師及びプリセプター支援研修会 参加者:15名 10月18日(月) 13:20~16:30 講義「PDCAサイクルと業務の展開」 グループワーク:高橋真紀子
幡多福祉保健所	管内新任保健師研修会 11月15日(月) 13時~16時30分 参加者:11名 講義「PDCAサイクルに基づく保健事業の展開」 発表・グループワークの助言:小澤若菜

2) 地域保健活動支援

高知県健康長寿政策部健康長寿政策課、高知県健康政策部健康対策課・福祉保健所地域支援室と協働し、各管内の地域保健活動の取り組みに関する研修会の講師や助言を行った。また、市町村が取り組む保健活動への参画、助言を行った。福祉保健所の地域保健活動報告会では、市町村の様々な事業や保健活動に関する報告を通して、参加者同士、活発な意見交換や質疑応答がなされた。報告会での助言を通して、参加者が、保健活動の評価の視点や方法を学び、より効果的な実践を目指す機会となった。

(1) 高知県

幡多福祉保健所管内保健福祉活動報告会を令和4年3月9日(水) 13:30~16:00 リモート開催にて行った。なお、報告は8題、参加者は20名であった。

(2) 高知県保健師人材育成評価検討会

令和3年度の保健師人材育成関係事業計画について、行政保健師確保対策について、情報共有および意見交換を令和4年3月14日(月) Web開催に参加した。

(3) 高知県国民健康保険団体連合会保健事業支援評価委員会

書面開催及びリモート開催にて、計6回支援評価委員会、12自治体の保険者を対象に行った。集団支援のグループワークは、対面にて7月5日(月)に行った。

3) 高知縣市町村衛生職員協議会保健師部会・高知県看護協会が行う研修会への協力

市町村衛生協議会保健師部会須崎ブロック・幡多ブロック研修会の企画・実施・評価に協力した。この活動では、看護管理領域および基礎看護領域と協力し、研修に使用する冊子の作成の継続と、研修評価に取り組んだ。

高知縣市町村衛生職員協議会保健師部会ブロック研修会	須崎ブロック：参加者数 33 名 12 月 9 日（木）13：30～16：15 「保健指導ミーティング研修会」
	幡多ブロック：参加者数 31 名 12 月 21 日（火）13：30～15：30 「保健師の人材育成におけるキャリアラダーの活用」

2. 研究活動

1) 高知縣市町村衛生職員協議会保健師部会・高知県看護協会と協働した取り組み

テーマ：「経験学習モデルを活用した保健師の経験を成長につなぐ研修プログラム」の評価に関する研究

看護管理学領域・基礎看護学領域の教員、高知縣市町村衛生職員協議会保健支部会の保健師、高知県看護協会の保健師が協働して、研修冊子の作成、研修評価を行った。

3. 活動の評価

地域貢献活動の 1) 高知県保健師人材育成、については、高知県保健師人材育成ガイドラインに基づいて、PDCA サイクルを運用している。アウトカム評価として、新任期の人材については、各自自治体において、個人の目標達成を評価し、高知県が集約している。プロセス評価として、「保健師人材育成評価検討会」において、評価検討会を行っている。それらの評価結果を次年度の人材育成活動に反映させている。また、「高知県保健師人材育成評価検討会」において、高知県内の公衆衛生看護に携わる人材（学生の教育、公衆衛生看護実践者の継続教育など）の育成を担っている関係者が、2 回／年の会議を開催して、年間計画の検討と評価を行っている。地域看護学領域の教員はこれらの委員会の主要なメンバーとしてアウトカム評価、プロセス評価を行っている。

昨年に引き続き、感染症流行期やワクチン接種時期と重なった集合研修においては、出席の難しい参加者がいたため、文書による助言とともに、次年度の参加の提案を行った。

地域貢献活動の 2) 地域保健活動支援、については、それぞれの活動ごとにアウトカム評価を中心にして、評価を行っている。

研究活動については、領域として取り組んだ研究活動の成果を社会に公表できていないものがあること、教員各自が取り組む様々なその他の研究については、領域独自で取り組みの状況や成果公表について評価をしておらず、看護学部の研究促進委員会にゆだねている。

4. 今後の課題

地域貢献活動については、今後も地域の関係者と PDCA サイクルの運用全体について協働的に取り組んでいく。協働的に取り組む中で、大学の貢献について継続的に検討をしていく。なお、次年度は、人材育成評価検討会にて、ガイドラインにおける人材育成の取り組みの進捗管理及び、ガイドラインの改定を行う予定である。

研究活動については、各教員が取り組む研究活動について領域活動として、研究のための時間を確保していくこと、成果の公表を支援していくことを強化していく。

<看護管理学領域>

1. 社会貢献活動について

1) ケア検討会（看護相談室）

【第1回ケア検討会】 テーマ「管理者の支援とは？」

日時：令和3年6月18日（金）18:00～20:30 場所：オンライン会議（ZOOM）

参加者：33名（病院看護管理者24名、一般企業管理者1名、本学大学院生6名、教員2名）

内容：事例提供者からの将来管理者になってほしいと思っているスタッフへの管理者側からのかかわりについての具体的な内容をもとに議論を重ねた。参加者からは、事例のスタッフへのかかわり方としては、本人の強みを生かす、師長と副師長（主任）がチームとして関わること、リフレクション支援といった意見があった。大学院生より事例に関連した文献（キャリア発達の停滞に関する文献、看護管理者のコンピテンシーに関する文献）の紹介や今回初参加の一般企業の管理者からも企業の人材育成について紹介があった。一人一人を見る（看る、観る、診る）こと、寄り添う事、親身になって接すること、アクセプタンスを高めて将来の絵を描くこと、最後まで逃げないこと、といった態度・考え方によって、スタッフが能動的に変わっていくことは、看護管理者にとっても重要な視点の気づきとなった。事例提供者からのコメントや参加者のアンケート結果からも、ディスカッションを通して経験の共有や看護管理者としての在り方の見直し、自己の振り返り、看護管理におけるヒントをみつける機会となったという意見が聞かれた。

【第2回ケア検討会】 テーマ「主任・副師長への関わり」

日時：令和3年10月8日（金）18:00～20:30 場所：オンライン会議（ZOOM）

参加者：26名（病院看護管理者17名、一般企業管理者1名、本学大学院生6名、教員2名）

内容：事例提供者からは、主任の行動変容を促す効果的な指導について事例の提示があった。事例の共有後、主任は現在の病棟のシステムへの感情と現在の行動のつながり、師長が向き合う覚悟の必要性、個人に合わせて指導スタイルを変える必要性、インシデントの振り返り等のネガティブになりがちな場では当事者の逃げ場を作る大切さなどの意見が出た。大学院生より事例に関連した文献（リフレクションを中心とした経験学習とポジティブおよびネガティブフィードバックが部下に与える影響に関するもの）をもとに更に事例を深め、第1回目と同様に参加者からは日々管理者としてスタッフとどのように関わっているか振り返る機会となったなどの意見が多かった。（詳細は学部のHPにて報告している <https://www.u-kochi.ac.jp/~kango/category/r03-kanri.html>）

(1) リカレント教育&交流会

日時：令和3年11月6日（土）14:00～16:30 場所：オンライン会議（ZOOM）

参加者：8名 テーマ「リフレクションについての意見交換」

学内の講師からの講義を基に「リフレクションについての意見交換」という形式で、修了生間の交流会を兼ねたリカレント教育を実施した。遠隔会議のために、対面で会食することはできなかったが、持ち寄った地元のスイーツを囲みながら、和やかに日頃の自分たちのリフレクションを語りあう機会となった。

(2) 高知医療センターとの包括的連携事業

本年度は、看護管理学領域からは、継続教育支援としてマネジメントリフレクション（2回）、QCサークル活動コンサルテーション（オンライン会議システムとメール）を実施した。

(3) 健康長寿センター事業への参加

入退院支援事業の研修事業「管理者研修」「看護管理者研修」「入退院支援コーディネート能力修得研修」「入退院支援コーディネーターフォローアップ研修」「多職種協働研修」の研修の企画運営に参画し、講師を務めた。詳細は、令和3年度健康長寿センター報告書にて報告している。

2. 研究活動について

看護管理学領域では、それぞれの教員が学内の戦略的研究プロジェクト推進費や科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。

看護管理領域において共同して取り組む研究には「看護管理実習における学生の学びに基づく実習プログラムの評価」があり、研究成果は、日本看護教育学会第31回学術集会において「看護管理実習におけるグループ活動に対する学生の評価」（内川洋子、山田覚、久保田聰美）を発表している。

また、大学院修了生の学会発表支援を行い、第25回日本看護管理学会において、修了生が発表を行った。

3. 抄読会

看護管理学領域専攻の博士前期、後期課程の学生と看護管理学領域の教員が中心となって、週に1回実施している。本年度は、4月第1週より遠隔会議システムを活用して、精力的に実施し、夏季、冬季休業期間を除いて、2月末まで毎週継続した。プレゼンターは領域の博士前期課程の院生に加えて、領域外（DNGL）の院生や教員も分担し、研究のレビューとクリティーク、実践への活用について活発に討議した。本年の対象論文は、31本、延べ参加者数は、202名であった。

4. 評価

前年度の課題であった、社会貢献活動の中で特に重視しているケア検討会を年2回に絞って、参加人数の増加と内容の充実をめぐることができた。

本年度の重点目標であった抄読会は、遠隔会議システムを活用したため、幅広い領域から参加が可能となり、参加人数も増えたことは評価できる。

5. 次年度の課題

参加者の多いケア検討会を基盤としたネットワークの拡がりを目指す。遠隔会議システムを活用して、高知県から全国的なネットワークに、そして学際的なネットワークに拡げていく。また、前年度から課題であった全学的な取り組み（医療センターとの包括連携事業や健康長寿センターの事業等）とのつながりを視野に入れたテーマ選定に注力していきたい。

抄読会に関しては、次年度は、博士前期・後期合わせると領域全体では10名となる。それぞれの背景や研究テーマも考慮しながらも持続可能な仕組み創りを目指していく。

<共創看護学領域>

1. 本年度の活動総括

共創看護学領域は開設2年目をむかえ、博士前期課程2回生1名、1回生4名、博士後期課程2名が在学し学んでいる。初年度と同様に、新カリキュラムの運営と共に、学生の学修環境の整備を中心にやっていった。

令和3年度は、博士前期課程の学生2名が「COVID-19患者が入所する宿泊療養施設に従事した看護系大学院生が抱いた困難と成長」をテーマに研究に取り組むなど、学生の自主的で活発な研究活動が展開されている。同時に、それぞれの教員が、競争的研究資金を獲得し研究活動に取り組んだ。また、今年度、博士前期課程を修了した学生1名は、博士後期課程に進学することを決めている。今後は、ますますバラエティに富んだ研究方法を駆使できる領域集団が形成され、看護学の殻を打ち破るような研究を行い、広く社会貢献ができるようになって考えている。

1) 社会貢献

(1) 高知医療センターとの包括的連携事業

高知医療センターが開催する「第11回高知医療センター看護実践発表会」に講師として参加、基調講演を実施した。参加者は83名。基調講演後には9題の事例研究、および、実践報告がなされた。

2) 研究活動

(1) 在学生の自主的な研究活動

テーマ：COVID-19患者が入所する宿泊療養施設に従事した看護系大学院生が抱いた困難と成長

研究者：今中与主安・岩本幸大

感染拡大時に宿泊療養施設で従事する看護系大学院生の心理的支援や準備性に貢献できるよう、宿泊療養施設に従事した看護系大学院生が抱いた困難と成長の実感を明らかにすることを目的に行った。対象は、看護師免許を持ち、看護系大学の学位を取得しフルタイムで博士課程に進学しているCOVID-19患者に対応した高知県立大学研究科の学生5名で、フォーカスグループを実施し、逐語録を作成、質的帰納的に分析を行った。

(2) 博士前期課程修士論文

テーマ：皮膚生理学的指標と主観指標による高齢者浮腫のアセスメント

研究者：中村夏子

浮腫の程度によって、皮膚の状態が生理学的にどのように異なるのかを明らかにし、浮腫の程度による高齢者の自覚症状の違いがあるのかを明らかにすることを目的に行った。研究協力者48名。浮腫のある皮膚は、より多くの皮膚生理学的変化が見られること、自覚症状の訴えの程度と浮腫の程度との関連、また、既往歴との関連性などが見出され、エビデンスをもって、臨床に重要な示唆を提供することができた。

(3) 教員の研究活動

テーマ：障害文化と健常文化を超えて共創する支援のパターンランゲージ

科研基盤研究(C)2021年-2024年

研究代表者：畦地博子

本研究の目的は、障害者の多様性を認め、障害文化と健常文化を越えて共創する支援のあり方を探究することであり、多様性・文化の差異に配慮した優れた障害者支援(good practice)の実践知に内在しているパターンを明らかにし、説明力あるランゲージを提案することである。小児看護、精神看護、養護、老年看護などさまざまな看護領域の研究者と、文化人類学を専門とする研究者が学際的に協働して実施している。本年度は、中心のコンセプトとなる「共創」と「障害文化」についての概念分析を行った。

テーマ：がん化学療法による手足症候群および爪囲爪炎の早期検出と新規外用剤による予防的介入
科研基盤研究(C) 2018年－2021年

研究代表者：池田光徳

がん化学療法薬であるマルチキナーゼ抑制薬の投与により高頻度に発症する手足症候群／爪囲爪炎病変の発症機序を、皮膚生理学的検査方法を用いて明らかにし、本症の最早期病変が何であるかを検討した。手足症候群／爪囲爪炎の発症を抑制するためには、どの時期にどのような看護介入を行うのが適切かを検討した。手足症候群／爪囲爪炎をモデルとして、看護師が皮膚をアセスメントする際に簡便かつ有用な手段を見出すことにより、EBNに基づいた看護技術を展開できるのではないかと考えた。

2. 本年度の評価と次年度の課題

修士課程第1期生1名が博士前期課程を修了することができ、ストレートで博士後期課程への進学を決めている。また、学生数も増え、学生の自主的な研究活動も活発化した。次年度には本課程の3名の学生が修士論文に取り組むこととなる。複数名の学生が研究に取り組む状況は我々にとっても初めてであり、教育、研究（学生および教員）および社会貢献を遅滞なく推進することに課題がある。

<災害・国際看護学領域>

1. 活動内容

1) 社会貢献活動

(1) ケア検討会

令和3年度のケア検討会は、災害・国際看護学領域としては2年目の開催となった。前年度の開催を通し、地域のニーズも探りながら2回のケア検討会を企画・実施した。検討会では、地域の看護職ばかりではなく、行政職、院生も含め多くの参加者があり、情報を共有し、類似した状況、問題に対する異なる見方、解決のためのアイデア等について、活発な意見交換を行った。参加者は、情報提供に基づいた現象の多面的な理解、そして個々の状況に応じた解決への手掛かりを見出すことができた。

① 第1回ケア検討会

【日時】令和3年6月24日(木) 18:30~20:00

【場所】Zoomによるweb会議

【参加者】外部参加者13名、大学院生7名、教員4名、計24名参加

<ケア検討会内容>

先ず初めに、以下の演者から情報提供があった。

- ・話題提供「コロナ禍における訪問看護の現状とBCP策定の課題」
一社)高知県訪問看護連絡協議会会長、一社)高知中央訪問看護ステーション所長
在宅看護専門看護師 安岡しずか 氏
- ・情報提供「訪問看護ステーションにおけるBCPについて」
高知県立大学看護学部 木下 真里 教授

事例提供者からは、これまで高知県訪問看護連絡協議会に寄せられた質問等に関して説明があり、訪問看護関連体制について(BCP関連)、利用者・家族介護者の新型コロナウイルス感染への対応、制度・報酬算定について、ステーション職員の新型コロナウイルス感染での対応などが説明された。また、その他として、退院調整不備のままの退院の増加や、在宅看取りの増加などの現状の説明があった。一つの例として、事業所におけるCOVID-19感染者等発生時対応の典型が説明され、ケースを用いて実際の対応が説明された。その後、厚生労働省の通知や学会等の体制や支援方法の情報が提示された。最後に、BCP(事業継続計画)への課題が整理された。

情報提供者からは、訪問看護ステーションにおけるBCP作成の課題として、重要業務の選択、人員の確保、補償/インセンティブ、BCPの発動および終了のタイミングが整理され、各視点からの対応例が細かく説明された。

その後、質疑応答および意見交換が行われ、訪問看護ステーションと行政の保健師の連携はどこまで可能か、訪問看護ステーション毎のBCP作成はそもそも難しいのではないかなど等の質問や意見が出された。行政の保健師との協働は今後の課題であること、BCPは地域のブロック単位や系列ステーションでの作成など、各種グループ単位での検討が必要であることが議論された。

② 第2回ケア検討会

【日時】令和3年11月25日(木)

18:30~20:00

【場所】Zoomによるweb会議

【参加者】外部参加者6名、大学院生8名、教員2名、計16名参加



〈ケア検討会内容〉

先ず初めに、以下の情報提供があった。

情報提供「医療におけるBCP(事業継続計画)の策定」

高知県立大学看護学部 山田 覚 教授

情報提供者から、BCP(事業継続計画)策定時の問題点や課題、BCPの歴史、BCPとは、防災計画とBCPとの違い、BCPの進め方、高知県医療機関災害対策指針、などについて説明があった。これらの提供された情報に関して、参加者の所属施設での状況がそれぞれ報告された。BCPの課題として、公立病院の場合、事務職員が病院以外の組織も含め、ローテーションしているため、BCP作成等のノウハウをもった職員が定着せず、せっかく作成しても見直しが十分にできないなどの課題がある。このことは国内の公立系の他の病院も同様の状況である。また、BCPを維持して行く上で、上層部の理解や積極的な関与が重要であり、理解が無いとBCPに関する課題が挙がってもなかなか解決に至らない。などの意見があった。

ある施設では、災害に関する訓練は、看護部門で月一回行っているとの報告があったが、他の施設でも同様に看護部門のみで月一回訓練を行っていた。他の部門に比して看護部門は積極的であり、災害に関する活動は、看護部門が中心になり行っている傾向があった。また、施設全体の訓練は、年に1~2回程度行われていた。

参加したある医療施設のBCPおよびそれに基づく訓練や地域連携は、非常に実効性のあるものに仕上がっていた。更に、重症患者に対するヘリコプターによる県外搬送もシステム化されており、災害時の対応体制が整っていた。また、災害時の縮小あるいは一時停止業務も整理されており、そのために対応できない患者は、地域の他病院と連携するなどのルール化もできていた。当該医療圏内では、災害拠点病院と救護病院の連携もとれており、役割分担がされていた。このような災害医療体制の整備は、この医療圏が地理的に災害時に周辺からの支援が得にくく、自分たちで対応しないと事業継続できないという危機感があり、それを地域全体で共有しているためであった。

参加者は、以上の事例を共有しながら、自施設の課題を整理し、どのように改善を行けばよいかの道筋を確認することができた。

2) 研究活動

災害・国際看護学領域では、それぞれの教員が研究代表者として、また、相互に共同研究者として科学研究費助成金を受けて「災害に関連する専門職者・行政と住民とのリスクコミュニケーションガイドラインの提案」(研究代表者: 山田覚、2020~2023年度)、「全被災者の健康状態把握を支援するモバイル・ツール開発研究」(研究代表者: 木下真里、2020~2023年度)、「地域の全体最適を目指した減災ケアの可視化とツールの開発」(研究代表者: 神原咲子、2018~2022年度)、学外の組織から助成を受けて共同研究として「中小企業の事業継続計画の実効性チェック・改善のためのインタラクティブシステムの開発」(神原咲子、2021年度)に取り組んでいる。

研究成果として、著書として、Springer および南山堂からそれぞれ共著で出版した。また、Sustainability 1件、Water 1件、日本災害看護学会誌 1件、Health Emergency and Disaster Nursing、1件、高知女子大学看護学会誌 2件、高知県立大学紀要看護学部 3件の論文投稿を行った。

学会発表は、日本災害看護学会第23回年次大会 4件、地区防災計画学会誌 1件、第31回日本看護教育学会学術集会 1件、第25回日本看護管理実学会学術集会 1件、第41回日本看護科学学会学術集会 1件、日本国際保健医療学会西日本地方会 1件、それぞれ行った。

3) 領域活動

(1) リカレント教育、交流会

令和3年度現在、修了生は4名であり、修了生を集めてのリカレント教育等は行わなかった。修了生が未だ少ないこと、在学生に関しては以下の定期的なミーティングがあることにより、具体的な交流会の開催は企画しなかった。本領域の場合、DNGLの学生は本学の学生ばかりではなく、他

の4大学の学生もおり、学生同士の交流は日常的にあるが、教員を含めた交流はあまり活発ではない。例年、日本災害看護学会や世界災害看護学会、あるいはEAFONSなどではDNGLの学生が学術的な交流集会を企画したり、情報交換や意見交換をする場を設けることがあり、教員も参加していたが、今年度は昨年度と同様に新型コロナウイルス感染症の拡大により、それらの企画はなかった。

(2) 定例月曜ミーティング

毎週月曜日の12時～12時50分に、定例ランチョンミーティングを開催している。令和元年度は対面で行っていたが、昨年度と同様に今年度は新型コロナウイルス感染症の対応でZoomによる遠隔ミーティングとなった。今年度からは、看護学専攻の災害・国際看護学領域の博士前期課程および後期課程の学生も加わり、毎回10名前後の参加者で実施している。内容は、隔週で学生の研究の進捗状況の報告と相談、隔週で学生が博士論文、研究計画書、インターンシップや災害看護活動の報告などのプレゼンテーション、教員の研究報告や教育的なレクチャーなどを行った。報告されたテーマは「災害業務における保健師のかかわり ～地域住民の意識と行動に焦点を当てて～」 「外国人に対する防災学習」「日高村のデジタル化推進事業」「Barriers and Facilitators to Healthcare Access for Nepali Migrants during the COVID-19 Crisis in Japan」「福島第一原子力発電所事故による放射線災害がもたらした住環境およびその後被災者が変化させた住環境と健康に対する考え方の基盤の関連」「H.E.L.P. in Tokyo」「JICA 四国インターンシップ報告」「高知県立大学の災害に関する活動」「コロナ禍における訪問看護の現状とBCP策定の課題」「地域レジリエンスと科学技術と看護の役割」「高知における災害看護の始まり(98 豪雨水害からのスタート)」などであった。

2. 活動の評価

災害・国際看護学領域の企画するケア検討会は、今年度で2年目となった。新型コロナウイルス感染症の拡大の中、教員やDNGLおよび看護学専攻の院生が遠隔授業に慣れていること、昨年度の経験から地域の看護職もZoomによる遠隔会議に慣れはじめていることから、Zoomによるウェブケア検討会をすることとなった。2回のケア検討会の参加者は合計40名であり、昨年度より若干減少したが、意見交換には適当な参加人数となった。一方、これまで本領域の学生や教員は、国内外の地域で活動することが比較的多かったが、新型コロナウイルス感染症により今年度は殆ど活動ができなかった。特に、学生の教育として、例年地域の小中学校や高等学校での減災教育を定期的に行っていたが、叶わなかった。

DNGLの学生募集は令和2年度入試をもって停止し、災害・国際看護学の学修を希望する学生に対しては、令和3年度入試からは看護学研究科看護学専攻の前期および後期課程を設置し対応した。その結果、令和3年度の入学者は、博士前期課程が留学生1名を含め4名、博士後期課程が1名で、共同災害看護学専攻から看護学専攻への移行をすることができた。今後は、両専攻の教育・研究を推進するとともに、新領域としての実績を重ねて行く必要がある。

3. 今後の課題

今年度から大学院の看護学専攻に災害・国際看護学領域が正式に設置され入学生もあったが、来年度も博士前期課程に3名が入学する予定である。共同災害看護学専攻の学生6名のうち3名が修了し(海外2名)、来年度は計11名となり大学院生のマンパワーは確保されるが、前述の地域での活動の活発化は更なる課題となる。また、継続的に大学院生を受け入れ、これまで共同災害看護学専攻の活動で築いて来た県内外、あるいは国外のネットワークを維持していることは、大きな課題である。